



中

(十)

大

里

め

菩

い

ろ

介

の

薩

巻

山

時代小説文庫

州

時代小説文庫 10

大菩薩峠 (十) めいろの巻 全二十冊

昭和五十六年十二月二十日 初版発行

著 者 中里介山

発行者 原 秀行

発行所 株式会社富士見書房

東京都千代田区富士見一―十二―十四

電話東京二六一―五三七五(代表)

〒一〇二 振替東京⑦八六〇四四

印刷所 旭印刷 製本所 大谷製本

装幀者 熊谷博人

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-600110-7440(0)

時代小説文庫

10



富士見書房

大菩薩峠

(十)

めいろの巻

中里介山

目次

みちりやの巻(つづき)

セ

めいろの巻

一〇五

中里介山の旅

足立巻一四二

大菩薩峠

(十)

めいろの巻

みちりやの巻（つづき）

十四

駒井甚三郎と、田山白雲とは、房州南端の海岸を歩いている。

駒井は、軽快な洋装をして手に鞭むちを持ち、白雲は、鈍重な形をして画框がわくを脇わきにかい込んでいる。二人共に眼は海上遠く注がれながら、足は絶えず砂浜の上を歩いている。

田山白雲は房州に来て、海を見ることの驚異に打たれてから、しきりに海を描きたがっているらしい。

白雲がいう。

「いや、水の色にこうまで変化があろうとは思いませんでした」

「線と点だけで、この変化が現わしきれますかね？」

と二人が相顧みて立つ、

「さよう——谿谷けいこくの水と、河川の水とは、東洋画の領分かも知れませんが、海洋の水は、色を以て現わしたほうが、という気分がしなくてもありません」

「線を以て、色を現わし得るといふ貴君の見識が動き出しましたか？」

「そういうわけではありません……つまり淡水と、鹹水かんすいとの区別かも知れません、淡水は、線を以て描くによろしく、鹹水は、色を以て現わすのが適當という程度のものか知ら……」

「一概にはいえませんまい——しかし、東洋画で、海を描いて成功したものはありませんですか？」

「ないことはないでしょうが、私はまだ不幸にしてブツつかりません」

「水の変化が、多過ぎるからでしょう」

「さようかも知れませんが、また変化が少な過ぎるともいえます」

「貴君はいつぞや、小湊こみなとの浜辺に遊んで、海の水の変化と、感情と、生命とを、私に教えましたが、貴君たちの見る変化と、われわれの見る変化とは違います」

駒井甚三郎は、海水の一部分だけに眼を落してこういうと、白雲は、やはり広く眼を注いだままで、

「どう違いますか？」

「われわれは、まず海の水の色を見ます、それも色の変化を、貴君のように感情的には見ないで、数学的に見るのです」

「色を数学的にですか……それは、どういう見方でしょう？」

「まず、水の色の変化が幾通りあるかということ調べます、手にすくい上げて見れば透明無色なる水も、処により、時によって、いろいろに変化があるのは誰も見るとおり、それを学者は

精密に調べて、十一の度数に分けていました」

「ははあ、つまり、この水の色の種類に、十一の変化があるというわけですね」

「そうです……けれども、海の水には、まだ学者の十一には当てはまらない色があるように思われます、十一の標準もやがて変わるでしょう」

「そうですか、そういうことも、やはり学者の領分でなく、画家がやりたいことですね、円山まるやま応挙おうきよなどにやらせると、モット精密に色わけをするかも知れません」

「いや、精密な色わけは、やっぱり西洋人のほうが上でしょう、水の色を分類するのみならず、水の温度をも、彼らは精密に研究していますよ」

「なるほど……水の温度というものがありましたね、それも数字で現わさねばなりません、温度の高低が、色の深淺と関係がありますか知ら？」

田山白雲も、知らず識らず頭を数字のほうに引き向けられました。

「温度を計るというにも、時間と場所はもとより、海面と、海中と、海岸とで、それぞれ温度が違います、それを計るには、第一に、精良なる寒暖計というものがなければなりません、その寒暖計を適度の海中に下ろすには、またそれに相当した機械が必要です」

「なるほど——」

「そうでなければ、海水のある程度の水を、一々汲み上げて、それを、外氣の影響を受けないように、持ち上げる器械が必要です……私はこの頃、その器械を一つ工夫しました」

「ははあ、そうして、この水の温あたたか味みというものは、大抵どのくらいあるのですか？」

田山白雲は、海を見て、その感情の奥のひらめきに打たれて、水が活きている、と叫んだのは今にはじまったことではないが、駒井のような冷静な見方にもまた、相当の興味を引かれると見えて、水の色を、十一に分類したその根拠と種類を、もう少し尋ねてもみたし、また水の温度を、一々数字的にも知っておきたいらしい。

「海の水の温度は、大抵三十度より上にのぼることはなく、零点の下三度より降ることはありませんよ」

「その一度二度というのは、貴君がお考えになった器械によってつけたのですか？」

「いいえ、物の寒暖を計るには、西洋では、学者の間に一定の器械があるのです、つまり、寒暖計というものにも幾種類もあつて、学者の間では、そのうちのCというのをを用います、昨年の十月、私がそれによつて調べてみたところによると、この辺の、外洋の表面の温度は二十四度前後、三百尺ほど下ると、十七度前後になつてしまします」

「下へ行くほど、つめたいのですね」

「無論です……北海の方へ行けばモット相違があるでしょう、温められた河の水が注ぎ込む近海ほど、温度が高いのですね、今年の七月土用の頃、水田の中の水をはかつてみたら、四十度から五十度の間でありました」

「そうですか」

田山白雲も、ここでは、水が生きて五情をほしきままにする、という気焰^{きえん}を吐き^はかねて、駒井のいうところに傾聴するのみであつた。駒井は水のようにすましこんで、白雲の頭へはいる程度

の数字を扱さぶような態度で、

「われわれは、水の色と、温度とを、数字的に見るだけでは足りません、その成分をまた、数字の上に分けてみたくなるのです、つまり、水の中に含んでいるさまざまの有機物を分析して、それを表に現わしてみることに――それがまた、進めば進むほど趣味もあり、実際上にも密接な関係を生じてくるのです」

「川の水と、海の水とは、成分がちがいますしやうな？」

「それは無論違いますとも、川の水だけでさえ種々雑多な相違があり、海の水とても一様にはいえない、たとえば、淡水の氷は、二三寸も張れば人が乗っても危険はないが、海の氷は、二三寸では子供が乗っても破れることがあります」

「そうですか知ら、われわれは単に、川の水は甘い、海の水はからい、という程度にしか見ておりませんでした」

「その海の水のからさ加減も、ところによって非常な相違のあること、川の水の甘さにも、相違のあるのと同じことです」

「塩加減にも、違いがあるのですか？」

「ありますとも……普通の海水は大抵、千分の三十四五ぐらいの塩分を溶解しておるのですが、それでも物を浮かす力は到底河の水の比ではない……これは海ではありませんが、アメリカのユタというところにある湖は、千分の二百五十も塩分を含んでいるそうですから、人間が落ちて、どうしても沈まない、この湖では、泳げないものでも決して溺死でかしをするということがない、また

身投げをしても、死ねないからおかしい」

「ははあ……そういうものですか」

田山白雲は、感心して、沈黙させられてしまいました。

自分の印象的な、感激的な頭を以て、斯様な穏やかな説明を聞かせられると、感心の度が深いと見える。駒井にあっては尋常茶飯の説明も、持たぬ者より見れば、持つ者の知識の影が、過ぎるほど大きくうつるのも免れ難い弱点かと思われる。

かくて二人はまた、海をながめながら海岸を歩んで行くうち、言い合わせたように二人の眼が、ハタと地上に落ちて足をとどめました。

駒井と、白雲とが、急に踏みとどまった砂浜の上には、ぬかごにしては大きく、さつまいもにしては無^ぶかつこうな根塊らしいものが、振りまいたように散乱しておりました。

田山白雲は、物珍しそうに、わざわざひざまずいて、その子供のこぶしほどの大きな根塊を、一つ拾い取って打ちながめ、

「何だろう？」

会話の興味を中断して、白雲はその根塊の吟味に取りかかる。

見慣れない小さなグロテスク、それも一つや二つならばとにかく、砂浜のかなりの面積の間に振りまかれたように、ほとんど無数に散乱しているものですから、白雲も、特に注意をひかれたようで、特に手に取って熟覧してみたけれども、その何物であるかは鑑定に苦しむ。ただ、ぬかごの形をして大きく、さつまいもに似て無^ぶかつこうな、一種の植物の根塊であることだけは疑い

ないらしい。

白雲は腰をかがめたままで、その根塊の一つ二つを拾い、しさいに打ちながめてみると、駒井甚三郎は、立ちながら白雲の手元をのぞき込み、

「これはジャガタライもですよ」

「え、ジャガタライも……？」

「そうです」

田山白雲はまだジャガタライもを知らなかったが、駒井甚三郎はよくそれを知っている。

ただ駒井がいぶかしげにそのジャガタライもを眺めていたのは、ジャガタライもそのものが珍しいのではなく、この辺では、まだこれを栽培していないはずなのに、こうも多数に海岸に散乱しているのは何ゆえだろう。

駒井にとっては、それが合点が行かないので、同時にこれは難破船でもあったのではないか、という疑いも起り、難破船とすれば、それはこの近海に近づいた外国船であろうということまでが念頭にのぼってくるので、かなり遠くまで考えながら立っているものでありました。

田山白雲は、そんなことは頓著^{とんじやく}なしに、ただ単純に、その根塊を珍しがって、

「ははあ、これが音に聞くジャガタライもですか？」

「関東で清太いもというのがこれです、ところによって甲州いもだの、朝鮮いもだのといって、上州あたりでもかなり作っているはずですが……」

「いや、拙者は、はじめてお目にかかりましたよ、うまいですか……？」

田山白雲は、そのうまさそうな一つをヒネクリ廻すと、駒井が説明して、

「うまいというものじゃないが、滋養に富んでいて常食にもなります」

「米の代りになりますか？」

「外国では、米の代りに、常食としているところがあるそうです、濃厚な肉食をしている西洋人は、副食物のようにして、好んでこれを用います、ですから、或はこのジャガタラは、西洋人が落したものかも知れませんが、もしそうだとすれば、ワザと捨てたのか、それとも船がこわれたのか……」

「腐ってはいないようだから、ワザと捨てたんではありますまい、この辺の百姓が作って、干して置いたのを、波にさらわれたのではないかしら？」

「そうかも知れませんが……しかし、まだこの辺の百姓が、ジャガタラいもを作っているのを見かけませんが……」

駒井は、まだこのジャガタラいもの存在に不審が解けきれないでいると、白雲は画框がわを岩上にさし置いて、懷中から風呂敷を出して砂上にひろげ、

「それほどうまいものなら、持って行って食べてみましょう……西洋人に食えるものが、われわれに食えないというはずはない」

といって、その根塊の特にうまさうなのを選んで一々拾い上げて、その風呂敷に包みはじめました。

田山白雲は、晚餐ばんさんの賞美の料としてのジャガタラいもをブラ下げて行くと、駒井甚三郎は、白

雲のために、代って画框を受け取って、海岸を帰途につきました。

その時、駒井はこんなことをいいました。

もし、自分が海外の何れへか植民をしようという場合には、取りあえずこのジャガタラいもを植えつけてみたい。その手始めに、この地方へ栽培を試みようと思ったが、ツイにそこまで手が廻らなかつたのが残念だ。船を造ることに急にして、農業のことを忘れたのが残念である——植民は農業から始めなければならぬ——というようなことを言う。

「いけないのは、武力を以て、従来の土着の者を征伐して、その耕した土地を奪おうということです、それで一時成功しても、永く続こうはずがありません、やはり、新天地を求めて、自分から鋤を下ろして、土地を開かなけりやう、そです」

駒井はこの頃、新しくそれを悟ったもののようにつぶやく。

「その新天地というのは、一体どこにあるのです？」
白雲がたずねる。

「至るところに新天地はありますよ、われわれはまず、このジャガタラの地方へ行ってみたいと思う」

「ジャガタラとは、どっちの方面ですか？」

「この海を南の方面へ行きます——大陸に渡ってみようか、或は孤島に根拠を置いてみようか、その辺のことを考えています」

駒井は絶えず、その行くべき新天地の空想を頭に描いている。駒井の頭では、空想ではないが、